慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Le Portrait Sentimantal
Sub Title	
Author	芥川, 比呂志(Akutagawa, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.340- 344
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0340

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Le Portrait Sentimantal

芥川比呂志

日吉の駅から、坂道を、若い佐藤朔先生が上って来る。人の背丈をまだいくらも越えていない銀杏の若木の並木道を、度の強い近眼鏡をかけた先生は、ゆらゆらと、まるで背椎が辛うじて重い脳髄を支えているとでもいう風に、揺れるような歩き方で上ってゆく。投げやりのように見える足どりは、じつはしっかりしていて意外に速く、人を追い越す。レイン・コオトを着て、本のたくさん入ったふくらんだ鞄を持って、縁の上った帽子は、うしろから見ても、小さすぎる。

「あれが、佐藤朔」と、並んで歩いていた先輩が、私に教える。

「知っている」と、私は答える。

しかしその時、私は殆ど何も知ってはいなかったのだ。佐藤朔という名前をはじめて見たのは、中学生時代に神田の古本屋で買った、薄い同人雑誌の目次の中であった。「山繭」だったか、「虹」だったか、それともほかの雑誌だったか。エッフェル塔と、歩く婦人とを描いたピカソのペンのデッサンが表紙になっていたから「虹」のような気もする。

そのハイカラな雑誌の中で、いちばんハイカラなのが、見開き二ページの、ジャン・コクトオの詩で、その詩の訳者が、佐藤朔だった。天使とか、自転車とか、スウプとか、妙に新鮮な感じのする言葉ばかりで出来ている詩であ

った。

その内、こんどは別の古い同人雑誌で、佐藤朔の名をみつけた。それも、コクトオの詩の翻訳であった。

佐藤朔という歯切れのいい名前は、ジャン・コクトオという響きのいい名前と一緒に、私の記憶に刻まれた。

日吉で、私は佐藤先生に（あるいは、慶応の時間割黒板の伝統に従えば佐藤君）にフランス語を習わなかった。

ある時、私はラディゲの詩集「燃ゆる頬」の中の詩を数篇、翻訳して、先生に見て頂いたことがある。しゃれた短い詩で、私はそれを苦心惨胆して、しゃれてはいないが語呂の合った、短くはないが長くもない日本語の文句に直し、先生のところへ持って行った。一と通り目を通された先生は、文法上の誤りを指摘された後、笑いながら、気軽につけ加えられた。

「あれ、全部、訳してごらん」

それは思うだけで気の遠くなるような大事業だったから、私は先生の勧告には従わなかった。

しばらくして、私たちは同人雑誌をはじめた。その何号目かに、私はアポリネールの短篇集「虐殺された詩人」のなかから、短篇を一つ、ラディゲの詩の何倍分も悪戦苦闘して、飜訳した。この虐殺された短篇は、先生の目に止まった。

「あのアポリネール、読みましたよ。面白いじゃないか」

若い銀杏の並木道で、私は少なからずどきどきした。すると、先生は、ゆらゆらと歩きながら、笑いながら、また言われた。

「いっそ、全部訳して見たら、どうだい？」

私は卒倒しそうになり、その後しばらく、将来仏文科にすすむべきか、国文科にすすむべきかと、深刻に思い悩んだものだ。

結局仏文をえらびはしたものの、私は先生の鞭を、ある

いは先生の注がれる呼び水を、避けてばかりいた。そして先生の訳された「悪の華」を愛読した。

私は英文科の加藤道夫と芝居をはじめた。

そのころ、神田や本郷の古本屋には「ラ・プティト・イリュストラション」の出物が珍しくなかった。私たちはレパートリーを探すべく、その裏表紙に掲載されている劇評をたよりに、（新しい作家をみつけるこんなやり方も、先生から教えられたものだった）なるべく新しい号を漁って歩くのがたのしみだった。事実、そんな方法以外には、フランスの新しい戯曲を読むことが（少くとも大学生には）だんだん出来なくなりつつある時代だった。

ある日私は、手ごたえのある作品にぶつかった。題名は「荷物のない旅人」と読めた。作者は Jean Anouilh——アヌイか、アヌイルか、アヌイユか。

読んで、私は興奮し、加藤にすすめた。加藤は、読んで、ジロドウの「ジイクフリート」の模倣だ、と言った。私は首肯しかねた。

青山の先生のお宅へ伺った折、私はその話をした。戯曲は先生の専門外のはずで、生意気な大学二年生の私の声はいくらか弾んでいた。

ところが、先生は眼鏡の奥でゆっくり微笑し、やはり、いくらか弾んだ声で、答えられた。

「ああ、あれ。ぼくも読んだよ。きみたち、やれるじゃないか。訳したまえよ」

私は呆然とした。

戦争が烈しくなり、先生の御家族は北陸の方へ疎開されることになった。お宅へ伺うと、

「疎開というよりも、避難だよ、ぼくのは」

新聞用語、あるいは軍隊用語が、お嫌いのようだった。その少し前、堀辰雄氏のお宅へ伺った折、堀氏は言われた。

「疎開というより、隠遁だけれどもね、ぼくのは」

コクトオならば、何と言うだろうか。「虹」の昔を思い

合せて、ふと、そんな気がした。だが、コクトオなんか、どうでもいい。私は、加藤道夫のまだ印刷されていない「なよたけ」の生原稿を、万一に具えて、先生の疎開のお荷物に加えて頂きたいと願い出た。先生は快く引き受けて下さった。

戦争が終り、その同じ永福町の高架線鉄塔下のお宅へ伺った時は、先生も、私も、兵隊服を着て、まことにへんな具合だった。

「終戦っていうと、もうすぐ翌日から、ベレエをかぶって歩いているのがいるね。昨日まで、戦闘帽かぶっていたのがね。不愉快だなあ。何もそんなに急にベレエかぶらなくったっていいじゃないか、ねえ」

苦々しい口調があかるくなる。庭にトマトが植えてある。

「ああ、これ？　家のトマトはうまいんだ。いや、何でもないんだよ。青いところがある内は搖がないこと、それだけなんだ。待つんだ、熟すまで」

やがて、私は新劇団に入り、アヌイの「アンチゴーヌ」を翻訳し、上演した。

この時ばかりは、先生も、「アヌイを全部訳してごらん」とはおっしゃらなかった。もう、いくら言っても無駄だ、と、サジを投げられたからであろう。

先生の随想集「セーヌ河畔みぎひだり」の中に、私の好きな一章がある。「パリで会った詩人」というのが、その題名である。その中に、こんな一節がある。

「二流人物の作品や著述、または思想や人柄の中に、一流人物のそれらにみられないすぐれたものがある。（中略）何百名、何千名といる二流の中には、なにかの都合で一流になれなかった者もいれば一流になりたがらない人物だっているのである。（中略）二流の中に一流が埋もれている

ので、第三者にとってはそれを探しだすのがまた一苦労である。しかし埋もれていることはたしかなのである。（中略）僕のような詩の愛好者には、そうした埋もれたものを探し出すことに非常な興味がある」（傍点筆者）

二流の自由を早くも揚言したのは、先生とも因縁の浅くないジャン・コクトオであった。こんなところが、ぼくは好きなのだ。一流の詩人や文学者、ボードレールやサルトルを読む先生の目が、その同じ夜に、若い無名の作家の作品を――たとえば、ピカソと共に飢えた犬のようにさまよっていた若いコクトオのような、得体の知れない青年の詩を、あるいは無名の一大学生の戯曲の生原稿を読むということが、有難い。あの眼鏡の奥の、つめたいような、あたたかいような眼を、畏敬する所以である。

（一九六六・一一）

先生と私

（佐藤朔先生のこと）

梅田晴夫

先生の大宮前のお宅は私にとってなつかしいと同時に、灰色だった時代に生きていた私の心に、ホンのかすかな希望のようなものを私はそこから得て帰った、大変ありがたい場所であった。

私がそのころウージェヌ・ラビッシュの、ヴォドビル喜劇のことなど、熱心に勉強しているのを先生は果してどのようにごらんになっていたのか。

本当ならモリエールとかラシーヌとかを、まじめに研究